

久米邦武の幸福論

西田 みどり

一 はじめに

世界はひたすら西洋化の道を歩んでいる。

何しろ、「発展途上国」とは西洋化が進んでいない国のことであり、「先進国」とは西洋化された国を指すほど、「西洋化」が世界の指標として機能しているのだ。GNH（国民総幸福量）を国の政策の中心に据えて独自の歩みを続けているブータンでも、携帯電話の普及やテレビの多チャンネル視聴によって国民の意識は確実に変わりつつある。ブータンでの目下の懸念は、テレビを通して外の情報が多量に入ってくるのだという。外の情報に魅せられ、休日には一日中テレビを見て過ごす人もいる。外からの情報はそれほど人を引きつける力を持っているのだろうか。

なぜ、世界は西洋化の道を歩むのか。なぜ、西洋に憧れ、追いつこうとするのか。西洋化の最も大きな特徴は科学技術の発達である。日々の生活を快適にすることから、移動手段、通信技術、娯楽まで、科学技術の守備範囲は広い。その一方で環境破壊や地域社会の崩壊など負の面も明らかになっている。しかし、負の面を知っても、一度手にした利便さを手放すのは難しい。

日本はアジアの中で近代化（つまり西洋化）にいち早く成功した国である。幕藩体制が崩壊し、近代国家を造る必要に迫られたとき、国家をあげて西洋化に突っ走った。

その代表的な政策の一つが明治四年（一八七二）の岩倉使節団の派遣である。徳川幕府が倒れてわずか三年後、近代統一国家構築のためのモデルを探すことを目的に、一年九カ月をわたって欧米十二カ国を歴訪した。約二年という期間の長さといい、人数といい、訪問した国の数といい、世界にも類をみない大規模な使節団である。

その公式記録である『特命全權大使米欧回覧実記』（全百巻、明治十一年刊行。以下『実記』）を執筆したのが、久米邦武だ。記録掛りとして常に岩倉具視全權大使と行動をともにした久米は、岩倉とともにいることで最もいい席で「西洋」を見た。他の団員が入れないところにも同行し、会えない要人にも会っている。いわば、西洋文明の粋を見てきたわけだ。

そんな久米が、使節団派遣から約五十年後の大正九年（一九二〇）、西洋文明は行き詰まることを言明している。西洋文明は人間を幸福にしないというのだ。述べられているのは『歴史地理 第三五巻』に発表された論文「西洋物質科学の行詰り」である。大正九年といえば、科学技術が人々の生活を大きく変えようしている時代であった。農業にはトラクターが使われ始め（米）、普及すれば人間の厳しい農作業が大幅に軽減される可能性が見えていた。日本では豊田織機が紡全工程機械製造に成功した。複写機が発明され（独）、電話が広範囲に普及し、ラジオの実験放送が始まるなど、情報流通の面にも革命的な変化が起き始めていた。電動機推進の航空母艦も建設された（米）。科学技術はさまざまな分野に新しい機材をもたらし、世界を変えようとしていたのである。

そんな中で発表された「西洋物質科学の行詰り」論文は、科学技術がもたらすものを「商売の競争に後る」といふより外には「意味はないとし、「静かに思慮をなし、自然を楽しむ余地を喪失しあるではあるまいか」としている。なぜ、久米は大正九年の時点でこのような見解を持ちえたのだろうか。『実記』での視点は科学技術の力を肯定したもので、日本の「後れ」を認めている。「後れ」を認めるということは、科学技術を「追いかけるべきもの」と認知し、肯定していることにはかならない。

しかし、その一方で『実記』では、「後れ」はたかだか五十年程度のものに過ぎず、

追いつくことができるとも述べている。その根拠は、科学技術発達の「後れ」の原因が才能の優劣にあるのではなく、生きるうえでの思想の違い、価値観の違いにあるからであるという。西洋は実利的に人間の力を「助力」する機械を発明する道を進んだ。東洋は技術の発達に執着せず哲学的な研究にその知を費やした。だから、「後れ」が出たのであって、それを転換すれば日本が科学技術を発達させるのはたやすいと久米は見ている。

久米のこの見解が正しかったことは、岩倉使節団から約五十年後の大正九年、先述したように、豊田織機が紡全工程機械製造に成功したことで証明されている。久米が考察したとおり、西洋の科学技術は五十年で追いつけるものであった。

しかし追いついた時点で、久米の物質科学に対する考えは、百八十度転回している。それは「追いつく」ものではなく、むしろ「止めなくてはならない」ものとなっている。人間の幸福が物質の科学技術の中にはないからである。そして、その結論に至った観察は、すでに『実記』の中に散見される。

現在の日本が幸福な国だと考える人は少ないだろう。何しろ年間自殺者が十四年連続で三万人を超えているのである。一日約百人が自殺している国を、とても幸福な国だとは言えない。明治初期、日本が目指したのは本当にこのような国だったのだろうか。久米の眼差しを通して近代化初期の日本を見ることで、この問題に迫ってみたい。本論文の構成は以下になっている。第二章で久米の背景を簡単に紹介したのち、第三章では『実記』の中で久米が指摘する西洋と東洋の思想の違いについて比較する。その後、第四章で、「西洋物質科学の行詰り」論文を検証することで久米の幸福観を追究する。

二 久米邦武の背景

久米が生まれ育ったのは佐賀藩である。幕末の佐賀藩は早くから西洋の科学技術を取り入れ、自前で蒸気船まで建造した先進的な藩として知られていた。蒸気船を自前で建造したのは四藩のみであったから、佐賀藩の科学技術が群を抜いていたことがわかる。早稲田大学を創立した大隈重信も、日本赤十字社を設立した佐野常民も、政治家として活躍した副島種臣も、東京奠都を主張し、のちに東京府知事に就いた大木喬

任（たかとう）も、司法権の独立に尽力した江藤新平も、佐賀藩出身である。

そんな中で、久米邦武は地味な人物である。

藩校・弘道館で漢学を中心とした当時の基礎的な学問を身につけ、藩きつての秀才として江戸の昌平坂学問所に遊学、帰藩後は藩主・鍋島直正の近侍を務めるなど、佐賀藩では有名な人物であった。

にもかかわらず、久米の名前がほとんど知られていないのは、華々しい政治の世界に入らず、執筆と研究という地味な道を選んだからであろう。久米の最初の著作である前掲の『実記』は、帰国後五年の歳月を費やして書かれた大著で、久米自身が「心血を注いだ」と述べているように、久米の運命を決定づけたものである。当時の日本人の西洋に対する見方を詳細に残した記述として他に例がない。そして、その見方の中に、久米の幸福論が見え隠れしている。

久米に使節団参加の要請が来たのは出発十日前であった。

それまで久米に洋行の経験はない。

明治初期、海外自体が庶民にとつて現在の宇宙のように遠い存在だった時代であるが、久米は二つ返事で引き受け、大急ぎで準備に取り掛かっている。

岩倉使節団のメンバーは「頭の西洋化」が進んだ人、つまり西洋かぶれの人が多く、洋行経験者も何人かいた。団長である岩倉具視は、西洋をどう捉えるかについての視点の多様性が必要だと考えたのだろう。西洋を信奉し科学技術に畏敬の念を抱いているものばかりだと、先方に取り込まれてしまう。久米を記録掛りとして身近に置いたのは、江戸期の教養を深く身に付けた人物の眼差しに期待したからに違いない。

当時の西洋諸国は科学技術をバックに蒸気船や大砲などの武器を製造し、アジアの大半を植民地にしていた。植民地にならなかつたのは日本とタイだけである。タイの場合はイギリスとフランスが覇権争いをしていたため、いわば西洋側の事情である。岩倉は西洋のそうした植民地主義に警戒感を持っていた。権謀術数に長けていると、半ば悪口のように言われることが多い岩倉だが、久米の人選にもそうした計算が働いたことは想像に難くない。その期待にたがわず、西洋文明の限界を見極めていた久米の視察を紹介したい。

三 『実記』における久米の比較の視点

三・一 『実記』は二重構造——視察報告と久米の論説

『実記』は、公の報告書であると同時に、久米自身の論説集でもあるという二つの面を持っている。というのも、『実記』の記述は二重構造になっているからである。客観的な実録の視察報告と、久米の見解が入った論説の視察報告が、同じ誌面に書かれている。久米の見解が入った論説は一字下げになっており、客観的な報告とは、はっきり分けられている。そして、実はこの本のおもしろさは久米の見解の部分にある。

また、『実記』は、久米自身が取材した素材だけで書いているのではない。同行したさまざまな人に聞き、また他の部署で作成された視察記録も参考にしている。その代表的なものが『理事功程』と『視察功程』である。

『理事功程』とは、各省の理事官の報告である。省の専門分野に絞って、欧米の制度と実際の景況を視察し、日本にどう役立てるかを中心に研究したものである。文部省・司法省・大蔵省・宮内省、それぞれの省で作成されている。『視察功程』とは、政治・議会・新聞などを中心にした報告書で、左院視察団によって作成されたものである。

そういった広範囲な資料をもとに、帰国した明治六年（一八七三）から五年間かけて執筆された。久米はその間、太政官外史記録課長、大使事務局書類取調御用などを歴任して、太政官に籠って血を吐くような思いで執筆した。その過程で気づいたことと、自身の視察時に感じたことが久米の見解に反映している。恐らく、書かずにはいられなかったであろう。完成したものを何人かが読み、その後、出版されているから、久米の論説も公の報告として受け止められたと考えてよい。

久米が論説部分で報告している東洋と西洋の違いは以下の六点である。前者が西洋、後者が東洋の特徴だ。

- ①有形と無形
 - ②済生の道と高尚な理論
 - ③理系の学問と文系の学問
 - ④起業と哲学研究
 - ⑤「科学技術で便利な生活を」と「科学技術は贅沢を生む邪なもの」
 - ⑥日常生活に利便性を求める・求めない。
- この六点が、科学技術を日常の利便性に特化して発達させるか、反対にむしろ不便

さの中に暮らすという哲学を実践するかという分かれ目になっている。ここでは、紙幅の関係もあるので②済生の道と高尚な理論、③理系の学問と文系の学問に絞って述べたいと思う。

三・二 済生の道と高尚な理論

明治五年（一八七二）七月十三日、岩倉使節団はアメリカに続いてイギリスを訪問した。

まずロンドンでグランヴィル外相と会見、その後、バッキンガム宮殿や国会議事堂、郵便局、大英博物館などを見学している。これからの日本の首都を建設していくうえで参考なりそうなものは何でも視察である。いずれも日本の建築物とは異なり、壮大なものであるから、使節団は度肝を抜かれたのではないかと思うが、久米の記述は客観に徹しており、委縮した様子はない。

九月十九日にはニューキャッスルを訪れ、ロシア織物工場を視察している。

工場は広大である。何しろ百二十馬力の蒸気機関を使い、三百二十四人の人間が働いている。

羊毛がロシア布になるまでの工程を久米は丁寧に描写している。

刈り取った羊毛を石鹼水で洗ったあと、ソーダ溶液に浸して煮る。そのときたえずかき回さなければならないのだが、それは蒸気力を利用して鉄の熊手のようなもので行っている。そして染色、弾機、紡機、織機など幾つも機械にかけて布地になっていく——。

恐らくそれは日本ではまったく見ることのなかった、いわば大きな魔法の機械が動いているような光景であったに違いない。久米の驚きはいかばかりだっただろうか。

しかし、その光景に対して、久米はこんな観察をしたためているのだ。

「東洋ノ西洋ニ及ハサルハ、オノ劣ナルニアラス、智ノ鈍キニアラス、只済生ノ道ニ用意薄ク、高尚ノ空理ニ日ヲ送ルニヨル」³⁾

東洋が西洋に及ばないのは才能が劣っているわけでもないし、頭が悪いわけでもない、と断定している。そのうえで、東洋には経済的に豊かになるという志向がなく、高尚な考えや抽象的な議論をして日々を過ごすから（科学技術の開発といったことが）遅れてしまったのだ、としている。西洋についてはこう書く。

「西洋ノ民ハ之ニ反シ、営生ノ百事、皆屹屹トシテ刻苦シタル余リニ、理、化、重

ノ三学ヲ開キ此學術ニモトツキ、助力器械ヲ工夫シ、力ヲ省キ、力ヲ集メ、力ヲ分チ、力ヲ均クスルノ術ヲ用ヒ、其拙劣不敏ノ才智ヲ媒助シ、其利用ノ功ヲ積テ、今日ノ富強ヲ致セリ」

それに比して西洋の人々は生活全般において苦勞を重ねたあげく、物理・化学・機械工学を發達させ、この學問に基づいて人間の力を助ける機械類を活用することで、力を省いたり、集めたり、分けたり、また均一にするという技術を發達させた。それを用いることで、もともと劣っている才智を補った。そのような機械や技術をうまく活用することを積み重ねて、今日の富強を築いたのだ。

これに続けて、その富強の根底にあるのは鉄と石炭である、日本でもそれらは産出するが、日本人はそれを利用して産業を起こそうという発想はしないのだ、と述べている。

さらに、東洋と西洋の科学技術の發達の差は著しいように見えるけれども、実際はそれほどではない。最も發達しているイギリス、フランスでさえ、科学技術の發達はここ五十年來のことにすぎない。さらに、世界を見渡すと文明が遅れている国はおびただしくある、と記述している。

規則的に大きな音を出して動く機械が次々に布地を織っていく様を目の当たりにしながら、こんな機械を造り出した科学技術はたかだかここ五十年來のことにすぎないではないか、つまり日本だつてすぐ追いつけるレベルだと暗黙に示し、またイギリスは確かにすごいが、世界の大半の国は大したことはないと見る。久米の認知はかなり強気である。特に、イギリスだけではなく、世界の他の国のことまで、久米の比較の眼差しの内にあることは注目しておいてよい。世界的視野で日本という国の位置を見ているのである。

また、ここでの久米の言説は一見、西洋の科学技術への努力を肯定的に見、抽象的議論をしている日本を否定的に見ているようにみえる。前述の引用は、そんな久米の見解が書かれた部分であるが、「其拙劣不敏ノ才智ヲ媒助シ」という記述など明らかに西洋の批判になっており、「口濟生ノ道ニ用意薄ク、高尚ノ空理ニ日ヲ送ルニヨル」というやや批判的に書かれた東洋の特徴をむしろ肯定する要素も含んでいる。

東洋が高尚な議論をしていることを、むしろ久米は肯定しているのではないだろうか。もしこの推理が当たっているとしたら、この時点ですでに、鉄と石炭を基礎とし

た物質文明を久米は暗に否定していたことになる。人間の幸福は物質的側面にはない、むしろ高尚なる議論の中にあるのではないか。そんな見解が見え隠れしている。それは、物理や化学、機械工学といった理系の學問を、文系の學問より劣つたもの、下位の學問として見るこの時代の風潮と無関係ではない。

三・三 理系の學問と文系の學問

現在は理系の學問のほうが文系より難しいとされている。文系は誰でもできるが、理系には才能が必要であると多くの人が考えている。就職率を考えても理系のほうが有利だ。

しかし、この時代はそうではなかった。物理や化学、機械工学などの理系の學問は易しく、子どもでも理解できる。それに比して哲学や政治学は難解であるとされていた。久米はこう書いている。

「……故二理、化、重学ノ理タル、之ヲ性理政府ノ学ニ比スレハ、平易悟り易ク、其文ヤ循環トシテ、幼兒ノ耳ヲクルカ如ク、其理ヤ的切ニシテ、日常ニ知ラサルヘカラサル要項ノミナレトモ……」

物理や化学、機械工学の理論は、哲学や政治学と比べれば平易でわかりやすい。文章も順を追って展開しているから、子どもでも理解できる、その理論は事象に対してぴつたりと当てはまるものであり、当たり前のこととして知っていなければならぬ大切なことばかりである、というのである。

確かに、理系の學問は理論的に展開し、答えははっきりしている。子どもでも理解できるというのは、複雑で広範囲な知識をベースとした思考を必要としないという意味だろう。

この時代は理系の學問は文系より一段低いと見られていた。それは蘭学の地位が低かったことを見てもよくわかる。蘭学を学ぶのは次男以下で、家督を継ぐ長男が蘭学を学ぶなど、とんでもないことであつた。大隈重信は長男でありながら蘭学を学んだが、その選択にあつたのは親戚筋まで含めた家族会議が開かれている。蘭学を学び、緒方洪庵の適塾の塾長を務めた福澤諭吉は次男であつた（のちに長男が亡くなつたため家督を継いでいる）。久米も長男であるから、蘭学に興味があつても大つぴらに学べなかつた。佐賀藩では、藩主・直正が教育制度の一環として蘭学寮を開校し、家臣の子弟に進学を進めたが応募者は少なかつた。蘭学は偏見の中にあつたのである。

蘭学を学んだ人で医者になる人も多かった。眼科医や外科医である。蘭医と呼ばれたがこの医者の社会的地位も、漢方医に比して低かった。漢方医の力が及ばない治療を施すわけだから世の役に立ったのであるが、実際の仕事の価値と社会的地位に乖離があったわけである。御典医として登用されるのも漢方医で、蘭医の登用は遅い。仮に登用されても漢方医より下位であった。

やがて、実利主義が幅を利かせるようになるとともに、理系と文系の地位の逆転が徐々に進行した。外科医の社会的地位も上がっていった。しかし、日本は、もともと精神的な高さを大切に、「武士は食わねど高楊枝」というやせ我慢の思想がその基礎にあった国である。お金を汚いものと見る傾向も強かった。だが、西洋化とともに日本のこうした文化は底に沈んでいった。その流れの中で現在の物質主義、学歴主義、出世信奉の社会が出来上がっていったのである。

しかし、この時代に日本が生き延びるためには科学技術の発展は必要不可欠であった。本気で取り組まなければ植民地にされる恐れがあったからである。日本はこのあたりから、高尚な議論から実利主義へと、一気に物事に対する価値観を変えていったのではないだろうか。それが人々を幸福にするかどうかなど、考える余裕はなかったに違いない。「幸福」はある種、贅沢品であったのだ。

日本語の中に「幸福」という語が使われ始めたのは江戸時代である。が、それほど一般的ではなく、現在と同じような意味合いで頻繁に使用されるようになったのは明治時代になってからだ。『浮雲』（二葉亭四迷著）や『西国立志編』（サミュエル・スマイルズ著、中村正直訳）にその使用例がある。翻訳が盛んになる⁵⁾「happy, happiness」の訳語として定着、一般化していった。

言葉は概念を表すものであるから、その概念がなければ、言葉もない。反対に言葉が現れることで、潜在していた概念が顕在化することもある。「幸福」は西洋化とともに顕在化してきた概念かもしれない。

四 「西洋物質科学の行詰り」論文に見る

久米のコペルニクスの転回

四・一 『実記』から五十年後の久米の思想

日本人に実利主義がない。「口済生ノ道ニ用意薄ク、高尚ノ空理ニ曰ヲ送ルニヨル」と指摘してから約五十年後の大正九年、久米はまったく逆の嘆きを「西洋物質科学の行詰り」で述べている。

学界は物質の科学に圧倒されて文学は不振の甚だしいではないか。哲文史の三科に、西洋の哲理と、其文学の焼直しにてお茶を濁し、史学に至っては実に微々極まつた様に思はるゝ。緊樺一番元氣をつけて貰いたい⁶⁾。

学問の世界は物質科学の理系の学問に圧倒されて、人文系の学問の衰退が甚だしい。哲学、文学、史学という学問に対して、西洋の哲学や西洋の文学の焼直しを学ばせるといふ形でお茶を濁し、特に史学に至っては実にその衰退はどん底まで落ちてしまった。緊樺一番、心を引き締め、奮い立って人文系の学問を盛んにしてほしい、という。理系の学問が隆盛し、哲学・文学・史学の学問が適当にお茶を濁すような形で行われていないことを指摘し、何とか元氣を出すようにと強い口調で述べている。続いて書かれるのは、科学技術の成果の負の面である戦争のこと、それを防ぐには哲学や歴史といった人文系の学問の力が必要だということである。

西洋は物質科学の行詰りに、自ら戦争をおつ始め、兵力と財力を使い切り、疲れ果て、休戦し、否講和となり、今は後始末に困まり、将来の平和を維持せんと、是より世界を改造せねばならぬとの声を聞くが、世界の改造が出来るものではない。迷ふてゐるのだ。哲学者はどうしてゐる、歴史家は何んと言つてゐるか、地球は依然と歩調を変へずに大速力を以て回つてゐる⁷⁾。

西洋は物質科学の行詰りから、自ら戦争を仕掛け、兵力と財力を使い切った。そして疲れ果てて休戦し、相手国と講和を結んだ。現在はそうした戦争の後始末をどうするかに苦慮しており、将来の平和を維持するためにもこれから世界を根本的に改造し

なければならぬ、という。しかし、そう簡単に世界の改造などできるものではない。どうしてよいか途方に暮れているのである。こんな時こそ、人文系の学問が改造のヒントとなるような理論を提示しなければならない。この一大事に哲学者は何をしていいのか、歴史家は何と言っているのか。何か新しい指針が提示できないのか。だが、人間がこんなことで右往左往している間も、地球はまったく変わることなく大速度で太陽の周囲を回っている――。

久米はここで世界情勢を見ながらも、同時に地球の自転を意識するという、かなり俯瞰的な視点から世界を眺めている。久米の中には「地球の中における世界」という概念があり、長期的視野から目の前の出来事を分析する姿勢を獲得していたのである。それは、『実記』で、「世界の中の日本」を念頭に置いて日本を評していた姿勢と共通している。

四・二 西洋の物質科学の歴史はわずか百年

久米の視点の高さは、空間だけではなく、時間軸も超えている。人文の学問のだからしなさを指摘したあとは、科学的発展の経緯を歴史的視点（時系列）から検証しているのだ。当然ながらそれは西洋中心の記述となる。以下、要約する。

一七〇〇年代に入るまでは地球に君臨していたのは明であったが、物質科学の発達に従って西洋が表に出てくるようになった。ニュートンが引力を発見したことで力学が喚起され、続いてワットが蒸気力を発明した。ペーとラフが酸素と窒素を分析して自然理化学を起したのは、日本の明和のころである。そしてフランクリンが電気を捉えたのは日本が安永のころで、そのころから電気を利用するようになった。⁸⁾

この科学者たちの列記は西洋を称えるためではない。続けて、こうした発見・発明についてこう書かれているからである。

「今より百五十年にすぎぬ。是れ歴史眼より見れば、人の二、三代を易へる僅かの間は変化の始めであらう。」

つまり、西洋にしても物質科学を使い始めたのはまだ百五十年にすぎない（大したことではない）、たかだか、おじいちゃんかひいおじいちゃんの時からはないか、と暗に言っているわけである。

さらに、蒸気船の発明によって開国せざるをえなくなった日本の立場については、「……其の物質の科学が東洋の思想を圧迫し来つたのは、天保以来の事で、まだ百年に及ぶのである」⁹⁾

と、これも、西洋の物質科学は（今大げさに騒がれているが）、東洋の思想に強い影響を与えるようになってまだ百年もたっていないのだから、騒ぐほどのことではないと強調している。これは日本の世論を意識して書かれているのだろう。西洋の科学技術に委縮しがちな日本人たちには、西洋でも百年前は科学技術はそれほど使えなかった、その証拠に蒸気船で日本に来たのが一八〇〇年代であり、それ以前は帆船だったから日本には容易に近づけなかった、という事実を伝えるのは有効である。

そうした配慮をする一方で、科学技術そのものに対して、久米のまなざしは批判的だ。単に忙しくなっただけではないか、意味のない忙しさに追いまくられて、静かに思慮したり自然を楽しむ余地を喪失してしまっているではないか、という見解である。¹⁰⁾

「只虚の繁忙にもまれて、静かに思慮をなし、自然を楽しむ余地を喪失しあるではあるまいか」¹¹⁾

という。電信電話ができて、鉄道が敷かれ、さらに線路がないところでも自由自在に移動できる自動車が走るようになった。江戸時代からすると夢のような便利さであるが、久米から見ると、それは便利なものではなく、ただ意味のない忙しさを作り出し、思慮する時間を奪うものでしかない。

これはまさに今の私たちにも当てはまる指摘ではないだろうか。

四・三 時間を節約して手に入れたものは何か

科学技術がもたらしたものは、大きく分けて二つ考えられる。一つは時間の節約、もう一つは距離の節約である。では、節約して手に入れたものはいったい何だったのか。お金である。「商売の競争に後る」といふよりほかには「科学技術の意味はないと久米が指摘しているとおりだ。」

この論文が発表されたのは、電信電話が発達し、鉄道が通り、自動車走っているのが街の風景となっていたころである。その風景は明治初期とは様変わりしている。久米はこのような科学技術を一刀両断する。恐らく、当時あつては久米の意見はか

なり偏屈なものだと受け取られただろう。けれども、今聞くと、それが慧眼だったことがわかる。要約して紹介する。

電信電話は人工的なものによって自然の仕組みを損なうものである。声が先に届いて、物と人とはひどく後れるからだ。一八〇〇年の末明治以後は、文明開化を推し進めたため、かつての常識であった「言のいはれざるは行の及ばざるを恥じてなり」とはあべこべに、声が先に届いて、人は物と後に着くということが生じるようになった。それを契機として世の中の繁忙が激しくなった。鉄道ができ、さらに線路も引かないところを車が走るようになる、社会の繁忙はいよいよ激しくなった。でも、何が忙しいかと言えば、商売の競争に後れるというだけのことにはすぎない。自然の動きはこれまでとまったく変化はない。人間だけが意味のない（虚しい）忙しさにもみくちやにされて、静かに思慮し、自然を楽しむ余地を喪失しているのではないか。

今から九十年前に書かれた言葉である。

「商売の競争」と「静かな思慮の時間が取れる生活」——私たちは前者を選んでここまで来た。その結果、世界はどうなったか。アフリカやアジアではいまだに戦争（紛争）が続いている。

久米は戦争についても示唆に富んだ言葉を記している。科学技術の発達も戦争の要因だといっている。

このころ、ちょうど第一次世界大戦が一段落したところであった。久米はしかし、その一段落を「戦争の終了」とは考えない。ましてや、平和到来なども見ない。「七百万の生霊を殺し、三千億の財力を費しながら、其戦止むれば直に平和とは、虫の好い話である」と述べ、戦争は終わったが、戦のない乱世に入ったと見ている。そのうえこの戦争を誘導した「重き一因」は、「蒸気電気の機関を偏重したることだとしている。戦争の第一主唱者はドイツであるというがそうではなく、必ず教唆者がいる。誘導者もいる。そのほかに巨魁はまだ多い。軍需の製造主や軍費の調達者にも、教唆者誘導者があるだろう。それに加えて科学技術を偏重したことが、戦争の原因だと指摘している。岩倉使節団で西洋の科学技術を特等席で見て、その記録を書いた久米が、わずか五十年後に、科学技術が戦争を誘導するものだという考えに至っている。

五 おわりに

「世界の中の日本」から「地球の中の世界」へと、五十年後の久米の視点は高くなり、広い視野から見ること、目の前の出来事を正確に認知しようとしている。しかし、久米のこうした懸念にもかかわらず、理系の上位は現在に至っても続いている。科学技術は長足の進歩を遂げ、人文系の学問は、久米の期待するような歯止めとしての役割を果たしていない。

地球を何度も破壊できるほどの兵器を生み出し、自然破壊も後戻りできないほどの状態にし、ロボットの発明は人間の仕事を奪い、通信技術の発達は生身の人間同士のコミュニケーションを希薄にした。久米が『実記』の中で控えめに指摘した西洋と東洋の違いが、西洋優位で極端に現実化したのが現在の世界だといえるかもしれない。

それにつれて「幸福」が声高に語られるようになった。「幸福度」という言葉も生まれた。「幸福度」とは、概念でしかないものを数値化し、比較し、自分はいったい幸福なのかどうかを客観的に判定しようという動きである。数値化は「幸福でなくてはならない、幸福度を上げなければ」という強迫観念を生む。そのニーズに応えるように、幸福になる方法が、ファッションやダイエット、婚活や就活、マンションや家具、学歴や地位の向上、グルメや旅……とさまざまに姿を変えてメディアを席巻している。そうしたメディアが提供する「幸福になる方法」が功を奏していないのは、自殺者数が減少しないことから明らかである。

たぶん、必要なのは、新しい学問体系なのであろう。現実の暗部を抉ってさらけだし正義感を誇示するのではなく、人間の低次元の欲望を喚起するものでもなく、私たちの内部に顕在化しないで眠っている何かを起こす思想が求められている。それが「幸福」という概念の中に含まれているのかもしれない。

〈了〉

註

- (1) 『久米邦武歴史著作集 第三巻』四一二頁。
- (2) 同。
- (3) 『特命全権大使米欧回覧実記 二』二五三～二五四頁。
- (4) 同二五四頁。

- (5) 同二五四頁。
 - (6) 『久米邦武歴史著作集 第三卷』四〇九頁。
 - (7) 同四〇九頁。
 - (8) 同四一一頁。
 - (9) 同。
 - (10) 同。
 - (11) 同四一二頁。
 - (12) 同。
 - (13) 同四一四頁。
 - (14) 同。
- ※ 『実記』からの引用は、読みやすさを考慮し岩波文庫版を用いた。

引用・参考文献

- 久米邦武編修『特命全権大使米欧回覧実記』第一巻〜第五巻、一八七八年発行、博
聞社。一九七五年復刻、宗高書房。
- 久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』一〜五、岩波文庫 一九七七〜一九八二年。
『久米邦武歴史著作集』三巻、五巻 吉川弘文館 一九九〇年、一九九一年。
- 大久保利謙編『久米邦武の研究』吉川弘文館 一九九一年。
- 久米邦武著『久米博士 九十年回顧録』上巻・下巻 一九三四年発行、早稲田大學
出版部。一九八五年復刻、宗高書房。
- 大竹文雄、白石小百合、筒井義郎編著『日本の幸福度』日本評論社 二〇一〇年
- 本林靖久著『ブータンと幸福論』法蔵館 二〇〇六年
- 大橋照枝著『幸福立国ブータン』白水社 二〇一〇年
- 西田ほか著『日本近代化の比較文化的研究』大正大学比較文化研究所 二〇〇七年